

2019年11月5日

日本イーライリリー株式会社

〒651-0086
神戸市中央区磯上通 5-1-28
www.lilly.co.jp

EL19-49

～ 11月14日は「世界糖尿病デー」～ インスリン治療を50年以上継続している糖尿病患者さんを顕彰 第17回「リリー インスリン 50年賞」30名の受賞者を発表

日本イーライリリー株式会社(本社:兵庫県神戸市、代表取締役社長:シモーネ・トムセン、以下、日本イーライリリー)は、インスリン治療を50年以上継続されている糖尿病患者さんに敬意を表し顕彰する、第17回「リリー インスリン 50年賞」の授賞式を日本イーライリリー神戸本社にて11月4日(月・祝)に開催しました。

第17回となる本年は、過去最多となる合計30名の方が受賞されました。そのうち20名の方が授賞式に参加され、50年以上にわたるインスリン治療の道のりを振り返りながら、家族や主治医など周囲の方々への感謝や、他の糖尿病患者さんへの励ましのメッセージなどを力強くお話されました。受賞者の皆様には、ご本人のお名前を刻印した銀製の特製メダルと、世界糖尿病デーのシンボルカラーである青いバラのコサージュが贈られました。

授賞式には日本糖尿病協会 理事長で関西電力病院 総長の清野裕先生、日本糖尿病学会 理事で神戸大学大学院医学研究科 教授の小川渉先生、日本糖尿病協会 理事で東京女子医科大学 東医療センター 病院長の内潟安子先生、東京女子医科大学 名誉教授 大森安恵 先生、日本 IDDM ネットワーク 副理事長 大村詠一 様にご臨席頂きました。

授賞式で日本イーライリリーの代表取締役社長 シモーネ・トムセンは、「糖尿病治療を50年以上続けられている皆様にこのような賞をお届けできることを大変光栄に思い、また皆様の治療継続のご努力に心から敬服いたします。イーライリリー社は1923年に世界で初めてインスリンを製剤化した企業として、今後も世界中の糖尿病を持つ方々の生活改善に務めてまいります。」と語りました。

日本イーライリリーは、画期的な糖尿病治療薬の研究、開発および情報提供活動に尽力していくとともに、糖尿病と共に生活をされている患者さんに寄り添い、「リリー インスリン 50年賞」をはじめとしたサポート活動を通じて今後も貢献してまいります。



※写真に写っているのは、報道関係者様への情報公開をご了承頂いた受賞者の皆さんになります。

「リリー インスリン50年賞」とは

インスリン治療を50年以上継続されている糖尿病患者さんの長年のご努力を称えることを目的に、1974年に米国で始まりました。これまでに米国を中心に世界で14,000名以上の患者さんに授与されています。日本では2003年に表彰を開始し、第17回を迎えた本年度を含めてこれまでに172名の患者さんが同賞を受賞されています。



表彰式は毎年、世界糖尿病デー(11月14日)の前に開催しており、今年を受賞者の皆様に、ご本人のお名前を刻印した銀製の特製メダルと、世界糖尿病デーのシンボルカラーである青いバラのコサージュを贈呈しました。



日本イーライリリーは、「リリー インスリン 50年賞」を受賞された患者さんが、インスリン治療を継続する全ての糖尿病患者さんに勇気と希望を与え、治療に前向きに取り組む上での目標となることを願っています。

第17回「リリー インスリン 50年賞」受賞者プロフィール

※報道関係者様への情報公開をご了承いただいた患者さんのみ50音順でご紹介します。

※受賞者プロフィールの内容は、患者さん個人としての見解です。

※大西様、楠部様、小池様、T.S様(神奈川県在住)、T.S様(埼玉県在住)、K.S様(東京都在住)、K.S様(茨城県在住)、田邊様、椿様、土井様、花田様、水原様、K.M様、元山様には授賞式にご参加いただきました。

◆鮎井 美智子 様 (インスリン治療歴 50年 / 1型糖尿病 / 1939年生まれ / 石川県在住) 息子たちが一人前になるまで死ぬ訳にはいかない その一心で生きてきました。

糖尿病だと告げられたのは、二人目を出産する少し前のこと。4400gの子を死産で亡くし、この上ない寂しさとしさを味わいました。発症した当初、食事前に毎回血糖値を測ることがとても嫌でしたが、続けていくうち自分の体を知るために一番大切なことなのだと気づきました。三度目は無事に産むことができ、ふたりの息子が一人前になるまでは、決して死ねないと強く思って生きてきました。



つらいこともあったけれど、楽しいこともいっぱいあった。血糖値をきちんと測り、インスリンとうまく付き合えば、元気で長生きができると、多くの方に知っていただきたい。これから20年、百歳まで頑張ります。

◆岩崎 光身 様 (インスリン治療歴 50年 / 1型糖尿病 / 1931年生まれ / 東京都在住) ドイツ駐在中の30代で発症。家族の支えと歩んだ50年、胸を張って生きてきました。

発症したのは30代、ドイツ・デュッセルドルフに駐在中でした。会社に向かう途中で体がだるく、足が前に出なくなってタクシーで病院へ。一生インスリン注射が必要だと聞かされた時は「まだ若いのだし、くじけてたまるか！頑張ろう！」という心境でした。以前はブタインスリンによるアレルギーなども出て食事にも気を使いましたが、ヒトインスリンに代わってから随分と楽に。



87歳まで元気でこられたのは、家族の協力が助けられたこと、そして先生から26年間にも渡って自己管理のご指導をいただいたおかげです。「どこへ行っても胸を張っていい」という先生のお言葉が心に残っています。現在、週4回はデイサービスに通っていて、そこでの楽しみがカラオケで『箱根の山』を歌うこと。一日でも長く、元気で過ごせるよう頑張っています。

◆大西 要一 様 (インスリン治療歴 50年 / 2型糖尿病 / 1929年生まれ / 東京都在住) 心身ともに充実した日々を送ってこられたのは先生と出会えたおかげです。

飲料水をかぶ飲みしたり、スイカを一気に半分食べてしまったり。皮膚のかゆみもひどく、病院を受診しました。これまで50年に渡る治療の中で大きな転機となったのは先生と出会えたことです。心身ともに充実した生活を送ることができました。合併症を患うこともなく、今も不自由なく食事がいただけていることに、心から感謝しております。



規則正しい食事、インスリンと飲み薬を指示通り服用すること、さらに運動習慣を心がけてきました。今も徒歩やアスレチックで週3回ほどの運動を続けています。

◆金井 圭子 様(インスリン治療歴 51 年 / 1 型糖尿病 / 1966 年生まれ / 栃木県在住)

失明しても、透析してもいつもと変わらぬ態度で関わってくれた人たちに感謝。

口が乾き、体重が減少、あばら骨が見え始めるなどの異変が起こり、糖尿病の診断を受けたのは2歳11ヶ月。最初は風邪だと言われていたので、糖尿病だとわかって親はびっくりしたそうです。小学校入学まではインスリン注射のため毎日病院へ。入学してからは、学校に行く前に母親が注射をしてくれていました。

仕事中に低血糖を起こしたり、両眼を失明したり、腎臓が悪くなって透析することになったり。これまでいろんな出来事があったけれど、まわりの人たちは状況を受け止め、接し方を変えずにいてくれた。そのことで私も変わらずにいられました。今まで関わってくれた、すべての方たちに感謝しています。

◆楠部 ひさ子 様(インスリン治療歴 51 年 / 1 型糖尿病 / 1959 年生まれ / 兵庫県在住)

行動して伝えることで糖尿病の仲間やご家族が楽しく生きられますように。

糖尿病の症状が出たのは9歳。11歳から参加したキャンプで仲間と出会い、「医学は進歩する、だからできるだけ良い状態に体を守りなさい」という大切な教を先生方から学びました。また、阪神・淡路大震災を経験してからは「悔いのないよう今を生きたい。血糖コントロールするために生きているのではなく、人生を楽しむために血糖コントロールするんだ」と考えるようになりました。

1型患者会のボランティアも長く続けています。今回も1型の仲間や、1型のお子さんを持つ保護者の方々に、元気で長く生きられることをお知らせしたいという思いから、50年賞に応募しました。毎日、おいしいと感じながら食事することが小さな目標。そして6年前から構想を進めている、お料理エッセイを出版することが大きな目標です。



◆小池 偉太 様(インスリン治療歴 52 年 / 1 型糖尿病 / 1951 年生まれ / 埼玉県在住)

同年輩の患者と交流できる環境を求めて転院を希望。現在も同じ病院に通っています。

倦怠感がひどく、通学することさえ困難になったのが高校2年生の時。水道の水をやたら飲み、各授業が終わると一目散にトイレに駆け込んでいました。それまで学校を欠席することがほとんどなく、糖尿病を発症したことと同じくらい、学校を欠席したことが衝撃でした。地元の病院に通っている糖尿病患者は、高齢の方がほとんどだった。そんな中、大学生になった私は若年性糖尿病のサークルがある病院を知り、転院を決意しました。それが、現在も通っている病院です。レクリエーションで同年輩の方々と知り合えるといったサークル活動が、こちらに長年通う発端になったと思います。



◆T.S 様(インスリン治療歴 51 年 / 1 型糖尿病 / 1956 年生まれ / 神奈川県在住)

大変なこともあったけれど理解ある職場と上司に出会い自分らしい日々を過ごせました。

体に変調が起こったのは、小学校6年生の冬。喉が渇き大量に水を飲むようになり、休み時間ごとにトイレに行くようになりました。体重が減り続け、体がとてもだるかったことも覚えていますが。発症当初は、母がインスリン注射をしてくれていました。その頃の注射器は、使うたびに煮沸消毒しなければならず、夜になるとお鍋の中からゴトゴト音がしていました。クラスメイトの前で糖尿病であることは語らず、心許せる友人にだけ告げていました。

成人してからは、理解ある職場と上司(主治医)に出会えたこと、同じ1型の方がいる職場で、隠すことなく働けたこと、そして結婚して42年一緒に人生を歩んできたこと。皆様のおかげでここまでこれたことに感謝しております。時間に余裕ができたなら、これまで行ったことのある場所へ家族と旅行したいと思います。

◆T.S 様(インスリン治療歴 51 年 / 1 型糖尿病 / 1960 年生まれ / 埼玉県在住)

治療さえきちんと続けられれば健康な人と同じなんだと、オープンな心で生きてきました。

水をよく飲み、どんどん痩せて、最終的には昏睡状態になり入院することに。小学生の時に、糖尿病だと診断されました。発症当時は、食べ物のことでよく母親と喧嘩していましたね。そんな私の意識を変えたのは先生との出会いでした。ちゃんと治療を続けていれば、健康な人と同じ生活ができると先生から学びました。

就職してからも、1 型糖尿病であることはオープンにして、もし低血糖になっても対応できるようにしていました。そうして続けてきた勤務もあとわずか。定年後は、地域の活動に参加したいと考えています。

◆佐藤 能則 様(インスリン治療歴 55 年 / 1 型糖尿病 / 1944 年生まれ / 宮城県在住)

手探りな日々にも迷ったら具体的な体験談が聞ける患者の会やワークショップへ。

大学生の時、旅先の友人宅で意識不明になり、搬送先の病院で測った血糖値が 1200mg/dl。発症後しばらくは、尿糖測定用のテストテープだけが体調変化を具現する方法でした。そんな五里霧中の状態で、励みになったのが患者会。また『私の愛する糖尿病』は、これまでの療養生活を支えた大事な一冊です。

インスリン製剤の進化、用具の開発、食事の基準設定など、環境は目まぐるしく変わりますが、なにより大切なのは毎日の体調が平穏であること。迷いや悩みがある時は、血糖値コントロールの体験談を主としたワークショップ等が、きっと大きな助けになると思います。



◆K.S 様(インスリン治療歴 50 年 / 1 型糖尿病 / 1953 年生まれ / 東京都在住)

どんなことにもめげずまっすぐ向き合って 50 年を歩いてきました。

高校 1 年生の時、学校の尿検査で糖が出ていると判明し、漠然と「これから大変だなあ」と感じました。糖尿病を発症したからといって家族は重く捉えすぎず、変わらず接してくれていたように思います。インスリン治療が始まってからは規則正しい生活を守り、それでも自分の身に何か起こったら、目をそらさずちゃんと向き合うことを心がけてきました。仕事はデスクワークだったので、「何かおかしいな」と感じたらすぐに対処できる環境でしたね。

一番、長く続いている趣味といえば、自然と接することです。トレッキングに出かけて非日常の中に身を置くと、雄大な自然のすばらしさに感動します。



◆K.S 様(インスリン治療歴 52 年 / 1 型糖尿病 / 1962 年生まれ / 茨城県在住)

今も仕事に奮闘できるのは家族や周囲の方々の理解と協力が絶えずあったから。

発症当時はかなり幼かったので、記憶に残っているのは小学低学年のころから。インスリン注射のたび、子どもながら絶えず人目を気にしていました。当時の主治医主催のサマーキャンプに参加。同世代の子どもたちが頑張っている姿を見て「普通に生活ができるんだ」と気づき、元気づけられたことを覚えています。

今日という日を迎えられるのは、“自分が”ではなく、家族や学校の先生方の理解と協力があったから。今は仕事に奮闘中ですが、これから退職後も長く続けられる趣味を見つかけたいと考えています。

◆田邊 久子 様(インスリン治療歴 55 年 / 2 型糖尿病 / 1941 年生まれ / 岐阜県在住)

適切な治療で心身ともに健康に 地域を見守る保護司の活動で藍綬褒章をいただきました。

17 歳の時でした。口の渇きと多尿を覚え、診断を仰いだところ糖尿病と判明。大好きな甘いものを我慢するのが何より辛く、甘党の父親までもが私を気遣い、内緒で食べるようになりました。発症当初は内服治療で軽快しましたが、次第に倦怠感が強くなり、インスリン注射を開始。その後、自己注射によって安定し、普段通りの生活が送れるようになりました。自宅近くの職場に 42 年間勤め、地域のボランティア活動にも積極的に参加。2016 年には保

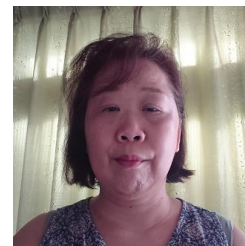


護司としての功績を認められ、藍綬褒章をいただきました。人生は山坂の多い旅の道ですが、主治医をはじめ、家族や周囲に支えられ、生きる喜びを実感しています。

◆椿 恵里 様(インスリン治療歴 50 年 / 1 型糖尿病 / 1960 年生まれ / 新潟県在住)
悲しい思いをいっぱいしても大丈夫だと思えたのは先生の励ましがあったから。

小児病棟に入院したのは 9 歳。2 月の始めだったので、患者仲間が次々と退院していく寂しさ、新学期が始まり病院の窓から見たランドセルの子どもたちの登校姿を覚えています。学生時代、長期の休みになると必ずコントロール入院をして体調を整えてきました。職場では良き同僚や、良き先輩に恵まれたと思います。子どもができた時、産科の先生に不快なことも言われたけれど、主治医の先生だけは励ましてくださった。

目立った合併症もなく迎えることができた 50 年、私をとりまく全ての方に感謝したいです。そして、こんな私の実体験が、同じように治療をしている方々の安心になりえることが励みです。



◆花田 明美 様(インスリン治療歴 50 年 / 1 型糖尿病 / 1945 年生まれ / 神奈川県在住)
熱心な主治医の先生のおかげで気持ちがとても楽になり糖尿病と上手く付き合えるように。

だるくて何もやる気がないのに、食欲だけは旺盛でした。当時の主治医から糖尿病だと告げられても「すぐ命に関わることでもないし」と暴飲暴食を繰り返していたように思います。現在、お世話になってる先生は患者のケアに熱心で、ハイキングや作品展、講習会などを企画して、楽しみながら糖尿病と向き合う方法を教えてくださいます。例えば、お付き合いで量が多くカロリーが高い食事をとる場合には「事前に少しインスリンを多めに打てばいいよ」とのアドバイスを受け、気持ちが楽になりました。今、糖尿病と闘っている皆さんに伝えたいのは、良い主治医を見つけることが大切だということです。



◆松田 芳枝 様(インスリン治療歴 51 年 / 2 型糖尿病 / 1926 年生まれ / 東京都在住)
40 代からのインスリン治療と医療・介護関係の皆様のご支援で長生きできました。

なぜか体のかゆみが治まらず、「糖尿病ではないか」と地元の病院の先生からつないでいただき、大学附属病院で診察を受けました。当初は投薬治療でしたが、肝臓を悪くしたのでインスリン治療に切り替え、そこから 93 歳になる現在まで一貫してインスリン治療を続けています。7 年前までは毎朝、入浴をしてから自分自身で注射をしていました。

ここまで長生きできたのは医療関係の皆様、介護関係の皆様のおかげ、感謝の言葉しかありません。本当にありがとうございます。



◆水原 佐知子 様(インスリン治療歴 50 年 / 1 型糖尿病 / 1941 年生まれ / 埼玉県在住)
娘をいつまで抱けるだろう…そんな当時の悩みが嘘のよう。今では孫が社会人です。

私の異変に気づいたのは、医師である父でした。近くの病院で検査したら、食前の血糖値がなんと 600mg/dl。「当院では手に負えない」と、病院を紹介され、即入院となりました。その頃の私は子育ての真っ最中で、娘もまだ 10 ヶ月。よちよち歩く姿を見て「この子をいつまで抱けるかしら」と考えることもありました。しかし、先生や薬局の方、大切な家族、そしてインスリン治療のおかげで私は生きてこられました。

今では孫も大きくなり、低血糖気味だとわかるとチョコレートなどを口に入れてくれます。私の様子がおかしいと皆に知らせてくれる愛犬にも、何度も助けられました。



◆K.M 様(インスリン治療歴 52 年 / 1 型糖尿病 / 1949 年生まれ / 東京都在住)
やさしい主人と結婚し二人の息子が家庭を持ち…家族に恵まれたことが人生の励み。

当時は 18 歳、高校 3 年生。喉の渇きと体重減少を不安に思い主治医のもとへ。母が糖尿病でしたので「私も…」という思いがありました。それから毎日、父がインスリン注射をしてく



れましたが、最初は痛みが強くて。これが一生続くのかと思うと暗い気持ちになりました。しかし、注射針が細くなりほとんど痛みがなくなったことで、希望が持てるようになりました。その後、私は主人と出会って結婚し、二人の息子を出産。今では息子たちも所帯を持ち、家族に囲まれて明るく元気に過ごしています。とりわけ主人には感謝してもしきれません。のんきな私をいつも気にかけて、やさしく見守ってしてくれます。

◆渡邊 康雄 様(インスリン治療歴 50 年 / 1 型糖尿病 / 1934 年生まれ / 島根県在住)
低血糖を防ぐためには値を測定するだけでなくそれを記録し解析する力をつけることが大事。



体重が減少し、教室でも喉が乾いて仕方がなかった。発症は教師生活初期の 30 代です。血糖自己測定器が出回っておらず、感覚で低血糖が起きないように注意しながら、60 歳まで公務を続けました。日常の中で最も怖いのは重度の低血糖です。意識不明になり、救急車で運ばれた経験は 5 回を数えます。2003 年以降、血糖自己測定器を手にしてからは、測定した数値を記録し、主治医の指導を仰ぎデータを解析する力をつけることを重視。パソコンで血糖値測定記録表を作って、低血糖の防止に役立てました。注射した時刻を記入するので、打ち忘れや二重打ちも防げます。自分の力による健康保持が大きな励みになる、測定記録を広くお伝えしたいと思います。

15 年ほど前、機関誌『さかえ』の記事を読んでから、50 年賞が目標でした。食事の世話をしてくれた妻の仏壇に、「ありがとう」とメダルを供えたいです。

◆元山 正広 様(インスリン治療歴 50 年 / 1 型糖尿病 / 1959 年生まれ / 青森県在住)
ヤングの会を立ち上げ仲間やいろんな方々と出会えたことが人生の糧に。



小学生の時、多尿状態が続いて地元の病院を訪れましたが糖尿病と診断されず、そのうち高血糖昏睡で意識がなくなり、救急車で大きな病院へ。そこで家族は医師から死ぬかもしれないと告げられたそうです。発症当初、母がインスリン注射をしていていましたが、嫌で打たせなかったこともあったと思います。

糖尿病との向き合い方が変わったのは、医師に勧められてヤングの会を立ち上げてから。そこから、全国の集会に出向いたり、小児糖尿病サマーキャンプの運営をしたり、主体性が身につきました。小学校の教師になり、全校児童の前で糖尿病について伝えられたのも良い経験でした。

世界糖尿病デーとは

拡大を続ける糖尿病の脅威を踏まえ、2006 年 12 月 20 日、国連は国連総会で、国際糖尿病連合 (IDF) が要請してきた「糖尿病の全世界的脅威を認知する決議」を加盟 192 カ国の全会一致で可決しました。同時に、従来、IDF ならびに世界保健機関 (WHO) が定めていた 11 月 14 日を「世界糖尿病デー」として指定しました。IDF は決議に先駆け、「Unite for Diabetes”(糖尿病との闘いのため団結せよ)というキャッチフレーズと、国連や空を表す「ブルー」と、団結を表す「輪」を使用したシンボルマークを採用。全世界での糖尿病抑制に向けたキャンペーンを推進しています。

(出典: World Diabetes Day Committee in Japan http://www.wddj.jp/01_howto.htm)

日本イーライリリー株式会社について

日本イーライリリー株式会社は、米国イーライリリー・アンド・カンパニーの日本法人です。人々がより長く、より健康で、充実した生活を実現できるよう、革新的な医薬品の開発・製造・輸入・販売を通じ、がん、糖尿病、筋骨格系疾患、中枢神経系疾患、自己免疫疾患、成長障害、疼痛、などの領域で日本の医療に貢献しています。

詳細はウェブサイトをご覧ください。 <http://www.lilly.co.jp>

糖尿病事業について

日本イーライリリー株式会社は、糖尿病のトータル治療を提供するリーディングカンパニーとして、画期的な糖尿病治療薬の研究、開発および情報提供活動に尽力していくとともに、「リリー インスリン 50 年賞」をはじめとしたサポート活動を通じ、糖尿病と共に生活をされている患者さんに寄り添い貢献してまいります。